

国際漁業学会 (JIFRS) 短信

<http://www.jifrs.info/>

事務局 〒631-8505 奈良市中町 3327-204 近畿大学農学部内

Tel : 0742-43-6021 Fax : 074243-6021 E-mail: mariji@nara.kindai.ac.jp

郵便振替番号 : 00100-6-26448 国際漁業研究会

三菱東京UFJ銀行富雄(トミオ)出張所 普通口座 3698979 国際漁業研究会

2012年度第2号

2012年10月12日刊

目次

- | | |
|------------------------------------|-------|
| 1. 副会長あいさつ「多様性について考える」 | 黒倉 寿 |
| 2. 学会賞選考委員会よりお知らせ
—本年度の学会賞選考結果— | 多田 稔 |
| 3. タンザニアでの I I F E T | 八木 信行 |
| 4. 2012年 I I F E Tタンザニア大会に参加して | 大石 太郎 |
| 5. 2012年度国際漁業学会大会参加報告 | 大南 絢一 |
- 事務局便り

1. 「多様性について考える」

黒倉 寿 (国際漁業学会副会長・東京大学)

多田会長のご挨拶が3回連載されて、その後、何かを書くように指名されたが、改めて、3回の連載を読むと、世界・日本を含む現代社会に関する経済学的な洞察にもとづいて、学と教育が何をすべきかについて深い見識が的確に書かれている。そのあとで、屋上屋を重ねるようなことを書いてもあまり意味がなかるうと思うので、生物屋が考える身辺雑記的なたわごとを書きならべてみることにした。

古い友人であるF先生と海の価値について議論していた時のこと。「海の生物多様性は様々な機能を持っている。海の価値を作り出しているのは生物多様性だ。多様性は一度失われたら元に戻らない。だから、海の多様性を保全しなければならない。」とおっしゃった。ちょっと違うのではないかと思った。生物多様性に価値がないとか、生物多様性が失われても良いと思ったのではない。

生物多様性は原因ではなくて結果ではないかと思ったのだ。地球上の生物は何回も大絶滅している。多くの種が絶えてしまった結果、生物多様性は大きく低下する。しかし、絶滅の要因が取り除かれると、再び様々な種が出現し生物の多様性が取り戻される。多様性があったて何かが生まれたのではなくて、絶滅の後に何かが生まれ、何らかの仕組みが働いて、その

結果として、多様性が生まれたように見えるのである。おそらく、その仕組みは次のようなものだろう。わずかに生き残った生物がいて、その生物の機能によって、何かが作られ、何かが消費され、新しい環境が生まれる。すると、その環境に適応して比較優位を持つ生物が現れて、作られた資源を使い、また何かを作り、新たな環境が作られる。最初の動力が何か、まず何が作られるのかが問題になりそうだが、これは何でもよいのかもしれない。環境の揺らぎによって何かが生まれ、生まれた何かによって、また環境が揺らぐ、その揺らぎによって何かが生まれる。そういうしくみなのではないだろうか。もしそうだとすれば、この動的な繰り返しそのものが大切であり、そのダイナミックな運動によって、様々な機能が生まれて、いわゆる生態系サービスがもたらされていることになる。また、そのような運動体がある時点でとらえた静止像が生物多様性であろう。どちらかといえば生物多様性は結果であって、静的に存在する生物多様性が何かを生み出しているのではないだろうというのが、私が感じた違和感の内容である。

最初の生物活動が何であれ、最初に作られるものが何であれ、それによって何らかの資源と廃棄物が作られ、環境が変化する。すると新たなニッチが作られ、そのニッチを埋めるように適応的に進化して新たな生物が生まれる。これを繰り返すうちに、システムは次第に多様化・複雑化する。もちろん、その過程では、ニッチを失い絶滅する種もあるだろうが、全体としては、様々な資源やエネルギーの利用・循環のプロセスすべてで、びっしりとタイルを敷き詰めたように隙間なく様々な生物が存在し安定する。安定状態に何らかの揺らぎおこり、タイルの間に隙間が生まれ、またその隙間を誰かが埋めていく。こんな感じだろうか。

私がこのプロセスに魅力を感じるのは、社会や学問なども似たようなものではないかと思うからである。最初に作られるものが何であるかは問題ではないと書いたのには含意がある。間違った仮説でもそれが唱えられることによって、何かの応答が生まれ、研究が行われる。そうした研究の中にも優れた工夫があり、何かの発見が生まれてくることがある。それ以上に、筆者にとってみれば、能力の低い研究者にもニッチが生まれ、研究テーマが与えられ、それなりの職にありつくことができたということがある。社会についても、誰かが何かをすれば、それによって効用と価値が作られ、それを巡って新たなニッチが生まれる。そのニッチに誰かが入って何かをする。こうした連鎖が滑らかに進めば、様々なニッチが生まれ、社会的弱者にもニッチが与えられて、社会に貢献して、尊厳を持って社会に暮らすことができる。より大きな効用と価値を作ろうとすれば、より大きなニッチが生まれる。たくさんの効用を作ろうとすれば、より多くのニッチが生まれる。揺らぎが大きければ、生態系に敷き詰められたタイルの隙間と数が大きくなるのと同じことである。

最近、生産効率の向上や生産の拡大という発想にはあまり人気がないようだ。確かに、限られた効用・価値だけを求めて、その効率的生産だけを考えれば、比較劣位の弱者のニッチや存在空間は狭められるだろう。しかし、多様な効用と価値を求めて、その拡大を図れば、弱者にとっても多くのニッチが生まれるはずだ。そして、多様な価値観、生活、文化を持った様々な人が社会に存在し、社会が楽しくなるはずだ。「社会が停滞する・経済が停滞する」ということは、この揺らぎがなくなることなのだろう。だとすれば、自ら揺らぎを作り出そうとする人の存在は重要だ。だが、おそらく、私たちの社会はそういう存在が嫌だ。現に私たちは、自分の子供に、揺らぎを作ることが必要だから、現存する社会が揺らぐようなこと

を、言ったり行ったりしろとは教えない。事業仕訳などというものは、安定していると考えられる今の価値観の中で価値と認められないものはあるべきでないという考えに基づいている。その結果として、多様なニッチが生まれず、結局、弱者が苦しめられるのだということ、「仕訳人」は考えていない。東日本大震災はまさに巨大な「揺らぎ」だった。にもかかわらず、この揺らぎの結果生じた隙間にニッチを見つけて、様々な効用を産み出そうとする人がきわめて少ないように感じる。揺らぎに応じて周りが増えるので、隙間の形も変わる。どんな形がその隙間に適応的なのかはじめからわかるわけでもない。生態学的には、試行錯誤的に適応度の競争が行われ、あるものは適応的に進化し、ニッチを占め、あるものはニッチを奪われ絶滅する。それが生物の営みであり、これを避けることはできない。このようなダイナミズムに外力を与えて拒否することは生態的に不健康だ。もし、社会にもまたこのようなダイナミズムが必要だとすれば、私たちの社会の現状は病魔に侵されているのだろう。そしてその病名は生活習慣病だ。もし生活習慣病であるならば、治療法は容易である。生活態度を改めればよい。積極的に体を動かす。これに尽きる。変化に呼応して、様々な効用・価値を見つけ出し、その実現に努力すればよい。

2. 学会賞選考委員会よりお知らせ

—本年度の学会賞選考結果—

多田 稔 (近畿大学)

2012年8月4日に学会賞選考委員会(委員長:山下東子)が行われ、審議の結果、本年度の功績賞、学会賞、奨励賞が下記のとおり選出されました。

<功績賞> 真道重明氏(元・JIFRS副会長理事)

長期にわたりJIFRSのホームページの構築と管理に従事し、当学会の社会的知名度の向上に大きく寄与されるとともに、FAOの水産物統計データベースであるFISHSTATの利用に関して多大なる啓蒙普及活動を通じて我が国の水産分野研究者の便宜向上とレベルアップに貢献された。

<学会賞> 八木信行氏(東京大学大学院農学生命科学研究科)

JIFRS第8巻から10巻までに掲載された論文3編を中心に、水産物市場や水産物の国際貿易に関するまとまった研究を行い、さらに、JIFRS以外の学術誌にも研究成果を公表し、今まであまり研究の蓄積がなかった本分野の学術発展に大きく貢献された。

<奨励賞>

(1) 中島亨氏(東京大学大学院農学生命科学研究科)

Journal of International Fisheries に掲載された論文“Capturing Changes in Asymmetric Price Transmission”で用いられた価格伝達に関する分析手法 A Rolling Window TAR Estimation が産業組織論的研究において実用性に極めて優れた手法であると高く評価された。

(2) 松井隆宏氏（三重大学生物資源学部）と原田幸子氏（元・近畿大学博士研究員）の組
国際漁業研究に掲載された報告論文「わが国クロマグロ養殖の展望 ―立地および漁場の
制約に注目して―」は、規模の経済、範囲の経済という産業組織論の概念を用いて分析し、
今後の発展に向けた政策的、技術的に見た研究課題を解明したことを高く評価された。

今年度は会員からの推薦が少なく、多くの候補者の中から審査するには至りませんでした。
また、グループが受賞対象者になれるかについても意見が分かれました。審査規定の明確化
を図るとともに、来年度は多くの推薦をいただけますようお願いいたします。

3. タンザニアでの I I F E T

八木信行（東京大学）

7月16日から20日まで、タンザニアの首都ダルエスサラームで、国際水産経済学会
（I I F E T）の第16回大会が開催された。以下に、その概要をお伝えする。

国際水産経済学会（I I F E T）とは

I I F E Tについて、改めて説明すると、正式名を The International Institute of
Fisheries Economics and Trade といい、アイアイフェットなどと発音する。事務局はアメ
リカのオレゴン州立大学内にある。2年に1度の頻度で大会を開催し、今回はその16回目
にあたる。今回は約600人の漁業経済研究者が世界から参加し、日本人も約10名が参加
した。参加者の個人名をあげると、筆者のほか、山下東子（明海大）、東田啓作（関西学院大）、
柴田孝（大阪商業大）、大石太郎（東京大）、内田洋嗣（米国ロードアイランド大学）、星野江
里子（豪州タスマニア大学）、山崎暁（同上）などであった。また、FAOや世界銀行、US
A I Dとならび、日本からも、J I C A（国際協力機構）やJ I F R S（国際漁業学会）な
どが途上国からの出席者に対する旅費などの援助を行った。

特にJ I F R Sについては、諸先輩方の努力によってI I F E Tでの評価を確立させてい
る。I I F E Tは、2004年に品川の東京海洋大学で大会を開催した。その際は、当時の
J I F R S名誉会長山本忠氏（故人）が開催費用として私財を投じられ、その一部を使って途
上国の研究者を会合に招聘する「山本賞」を創設した。以降、五回の大会にわたり山本賞が
途上国からの参加者に授与された。今回のタンザニア大会でも、優秀な論文を書いた途上国
からの出席者をJ I F R Sの選考委員が選び、山本賞と副賞1500ドルをベトナムとタン
ザニアの研究者計二名に手渡した（写真のとおり）。あわせてJ I C Aも、セネガル、ベナン、
モロッコからの出席者に対して旅費負担を行った。これに対してはI I F E T事務局からも
謝意が伝えられるなど、日本のプレゼンス向上も図ることができたと考えている。

どのような研究発表が行われているのか

筆者は今回のタンザニアでの大会と、2年前のフランスでの大会に出席した。そこでは、
漁業管理の方式としてI T Q（譲渡可能個別漁獲割当）を導入した漁業で実際に漁業者の収

益が上がるのかどうか、船員の給与システムとして歩合制と定額制のどちらが良いのか、市場での魚価上昇は本当に漁業者に還元されるのかなどについて、実際の売り上げデータなどを分析して議論を展開する研究発表が多く見られた。

各国の研究者とも自国の漁業について、データを出しながら盛んに分析結果を発表しており、途上国の漁業に関する研究例も多い。今回も、例えばEUの衛生基準に対応させるための途上国で衛生基準を新規に設定しトレーサビリティを整えることについて、これが本当に利益をもたらすのかどうか、もたらすとすれば漁業者に還元されるのか、といった研究などが目を引いた。

望まれる日本人の積極的な参加

日本については、コンスタントに水産経済関係の国際学会に参加者を出しているものの、その人数は少なく、研究成果を発信している量は他国に比較して少ないと言わざるを得ない。このため、例えば、沿岸での漁業権漁業の本家はチリであるといった論調が欧米で広がる現象を許してしまっている。実際は、漁業権漁業は日本では江戸時代以前から存在しており、資源管理や紛争処理の事例も日本の方に蓄積がある。しかし、日本人の研究者が英語の論文としてあまり発信していないために、英文論文の量が多いチリの方が本家であるように勘違いされているのであろう。

このような例が頻発しないようにするためには、日本人研究者がIIFETなどに積極参加し、英語で研究成果を積極的に発表する必要がある。最近では、海外に在住する日本人の漁業経済研究者も多く、国際的な場でも活躍が目立っている。ただし在外の日本人研究者が題材としているのは海外の漁業であって日本の漁業ではない。彼らを日本に呼び戻して、日本の大学や研究機関などに積極的に採用し、日本全体の発信力を強化させることも一考に値するだろう。



写真は、IIFET大会でタンザニアの研究者に山本賞を授与する山下東子国際漁業学会理事
(2012年7月：撮影八木)



写真は、IIFET会合の様子
(2012年7月：撮影八木)



写真は、ダルエスサラーム漁港の様子（2012年7月：撮影八木）

4. 2012年 I I F E T タンザニア大会に参加して

大石太郎（東京大学 特任研究員）

この夏、タンザニアのダルエスサラームで開催された国際漁業経済学会（I I F E T）に参加した。7月14日に日本を立ちイスタンブールでのトランジット泊を経て現地到着。飛行時間だけで片道20時間の長旅であった。著者にとってアフリカは、灼熱の太陽と野生動物の王国というイメージであったのだが、実際には南半球のタンザニアは冬で空気も乾燥しており日本の夏より少し涼しいくらいだった。また野生動物は内陸部の国立公園でのサファリで見ることができるのだが、ダルエスサラームは沿岸部の都市でありエクスクーションもザンジバル島の水産市場の視察が主だったため野生動物に遭遇する機会はなかった。むしろ、アフリカにきたことを実感させてくれたのは、見知らぬ日本人に陽気にジャンボと呼びかけてくる現地住民と独特の衣装に身を包んだマサイ族の存在感だった。

著者ら（タンザニア訪問で著者は八木信行先生に同行させていただいた）は、治安への懸念から学会会場となっていたホテル「キリマンジャロ」に宿泊した。このホテルはタンザニア随一のホテルで銃剣を持ったベレー帽の守衛が何人もいたのが印象的であったのだが、それ以上に驚かされたのはキリマンジャロ山から程遠いダルエスサラームで、コーヒーや地元ビールだけでなくホテル名までキリマンジャロと名付けられているという事実であった。現地のスワヒリ語にはハクナマタタ（「気にするな」や「なんとかなるさ」を意味する）という言葉があるが、他のことは何も分からなくてもキリマンジャロとジャンボという単語さえ覚えておけばとりあえず日常のコミュニケーションはなんとかなる、そんな雰囲気を持つ国だった。

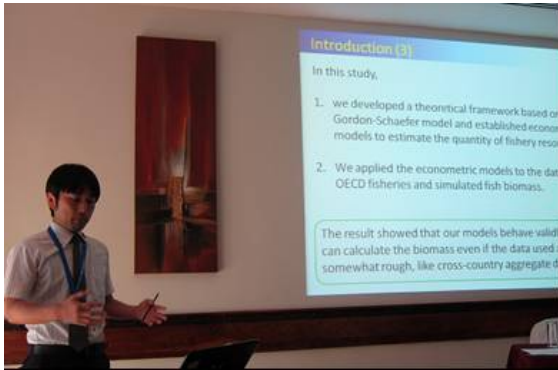
会場到着の翌日、オープニングセレモニーが行われ学会が始まった。学会の開催期間は4日間であったが、著者は初日に自分の発表、2日目に他のセッションの司会が控えていたため、前半2日間はホテルの1室に籠もりそれらの準備にひたすら追われていた。そのため、著者の情報は偏ったものにならざるを得ないのであるが、幸いなことに当学会では発表に使用されたパワーポイントとそれを論文化したプロシーディングスの多くがウェブ上に公開されるので、他の研究者の報告についての詳細はそちらをご参照頂きたい。なお全日程で設けられたセッション数はポスターセッションを含め70ほどで、1セッションに4〜5名ほどの研究者が発表するため、参加者は全体で300名ほどであった。また日本人の参加者は著者のお会いできた限りでは10名程度であった。

著者の学会初日の発表内容は、非平衡性を仮定したシェーファーモデルにOECD加盟国の漁獲量と努力量データを適用することで各国の漁業資源量を推定するというものであった。国家単位のマクロデータに対してシェーファーの生物資源経済モデルが機能することを示したことが本研究のコントリビューションであったが、発表後の質疑では手古摺ったものの論旨を伝えることができたことを確認できた。今回は著者にとって2回目の国際学会での発表であったが、前回のアジア農業経済学会（ASA）での発表（このときは多田稔先生に同行させていただいた）を踏まえてプレゼンに改善が見られたことが収穫であった。

また著者が司会を担当させていただいた「所有権と割当制度」セッションでは4つの報告がなされた。1つ目は漁場の私有化が社会余剰にもたらす影響に関する理論研究、2つ目はITQによる権利取引における沿岸と沖合間の協力に関する実証実験、3つ目は漁場の私有化やITQに多大な影響を与えたコースの理論の解釈に関する学説史的アプローチ、4つ目はアフリカ南西部のナミビア共和国の権利準拠型管理がもたらした漁業の効率改善に関する事例研究であった。抽象的な理論研究から具体的な事例研究まで全く異なるアプローチを専門とする研究者による発表と議論が新鮮であった一方で、本セッションでは私有や割当ありきではなくコモンズのような共有資源管理のあり方の意義について、より広く議論する必要性を感じた。

他のセッションも含めた全体の感想として、本学会では共有資源管理を含めた多面的な資源管理の面で日本人が貢献できる余地が大きいと感じた。今回の発表の多くは欧米の参加者によるもので、魚種が少なく権利取引し易いという漁業環境がその背景にある。そうした中で、魚種が多様で欧米と異なる漁業環境を有する日本で実践されてきた漁業管理や魚食民族としての日本における漁村コミュニティの意義について情報発信していくことは、その土地の地域社会や漁場に適した管理の可能性を提示していくことにつながるのではないだろうか。

また今回の学会では、東日本大震災と大津波で多大なダメージを負った東北水産業の復興状況について八木信行先生がご報告されたが、海外の参加者からの注目度は大変高かった。自然災害からの漁業の復興というテーマも日本人が今後海外に発信していかなければならない重要なテーマであることを感じさせられた。漁村社会のレジリエンスや放射能による風評被害など、理論、実証面から明らかにして発信していくべき課題は多い。大会事務局によると、次回のIIFETはオーストラリアのゴールドコーストとのことである。次回の大会にも是非参加させていただき、日本からの成果発信に取り組んでいきたいと思う。



初日の発表風景



現地の食事（トウモロコシの粉を練った主食ウガリに煮豆や魚が付いたプレートが一般的）

6. 2012年度国際漁業学会大会参加報告

大南 絢一（京都大学大学院 地球環境学舎）

去る8月4および5日の2日間、東京大学農学部にて2012年度国際漁業学会大会が開催されました。筆者の当学会への参加は昨年度からです。本稿では同大会を通じて印象に残った点を参加報告としてまとめさせていただきます。

まず、本年度の大会は一日目に個別報告および総会・シンポジウムを、二日目に個別報告の後半が行われました。本年度大会の個別報告では前年度大会の総報告数を上回る13点の報告がなされました。報告のテーマや分析手法も多岐にわたっておりました。もちろん報告数だけでなく各報告での活発な質疑応答がなされ、また、会場も一会場とはいえ常に満員の状態で、非常に熱心な議論がなされたことが印象的でした。なお、当日指摘がありましたが、質問やコメントが特定の方に偏ってしまったこと、特に学生を中心とした若手研究者からの質問が少なかったことは今後の改善点であると言えます。自戒を込め、本稿に記させていただきます。

大会一日目の午後には総会が行われました。特筆すべき点としては、本学会の活動方針として、国際的な研究の活発化、世界に向けた発信の強化について言及があった点が挙げられます。実際、当日の個別報告では多様な報告がなされましたが、学会名に冠されている「国際」性といった要素は外部からみるとやや物足りないものがあったかもしれません。特に若手研究者は、本学会の設立趣旨等も鑑みつつ積極的にこうしたテーマにも挑戦する価値があると言えるでしょう。

総会終了後に行われたシンポジウムは「再生可能エネルギーと水産業」がテーマでした。全国的な節電要請、再生可能エネルギー固定買取制度の開始が各種メディアを賑わす中で非

常にタイムリーでした。また外部からの参加者が多数来場されたことも特徴的で、水産業とエネルギー問題について社会科学的研究の必要性を感じさせるものでした。施設建設による漁業者行動の分析、外部経済を含めた費用対効果の検証、地域住民の合意形成・意志決定に関する分析など、今後の政策立案に資する科学的なエビデンスを提供することは今後一層求められているように思います。

私は消費者行動分析を主な守備範囲としていますが、本大会の参加を通じて、改めて水産経済研究における多様性について触れることができ、さらに水産経済の分野に対する関心が一段と高まりました。それほど充実した大会であったと思います。参加者の熱意も印象的でした。筆者も、本会の発展と水産業が直面する社会的課題の改善に向けて、研究活動を積み重ねて参りたいと決意を新たにしました次第です。最後に、研究・教育活動でご多用の中、多数の個別報告のとりまとめ、総会およびシンポジウムなどの準備にご尽力くださった事務局のみなさまにここに記して感謝申し上げます。本稿を結ばさせていただきます。

事務局便り

次期大会について

来年度の大会は、8月上旬に関西で開催される予定です。